論文の内容の要旨

論文題目　**Accentuation and *Rendaku* in Japanese Deverbal Compounds: A Comparison with Noun Compounds**

(日本語の動詞由来複合語におけるアクセントと連濁―名詞複合語との比較―)

氏名　山口京子

日本語の動詞由来複合語(後部要素が動詞の連用形である複合語)は、前部要素と後部要素の関係によってアクセントと連濁の傾向が異なることが知られている。例えば、「かるた取り」のように前部要素が後部要素の目的語となっている場合には、「アクセント有り(起伏型)・連濁無し」となる傾向が見られ、「二重取り」のように前部要素が後部要素を修飾している場合には「アクセント無し(平板型)・連濁有り」となる傾向が強い。ただし、後部要素が長くなると「野菜作り」・「にわか作り」のように前部要素と後部要素の関係に関わらず「アクセント有り・連濁有り」となる傾向も知られている。また、先行研究では「帽子掛け」と「日焼け止め」のようにアクセントと連濁の相補分布が見られることも指摘されている。

従来の研究では、このような現象に関して包括的なデータの収集はほとんど行われておらず、また、日本語のアクセントや連濁の理論的な研究は主に名詞複合語が対象となっており、動詞由来複合語についてのアクセントと連濁の研究はあまりなされてこなかった。これに対し本研究では、まずアクセント辞典から動詞由来複合語を収集し、実際に前部要素と後部要素の関係によってアクセントや連濁の有無がどの程度異なっているかを調査する。そして、調査によって明らかになった二種類の動詞由来複合語(前部要素が目的語であるものと付加詞であるもの)のアクセントと連濁の違いがどのような仕組みで生じるのかについて分析を行う。また、この理論分析を、アクセントと連濁に関して先行研究が豊富な名詞複合語と比較しながら行うことで、動詞由来複合語と名詞複合語のそれぞれの音韻的特性をより明確にする。

ここからは本研究の構成と各章の要点を述べる。まず第 1 章は、研究対象と研究の目的について述べ、次章以降の調査・分析で必要となる日本語の音韻論・形態音韻論の基本的な事項をまとめている。また、第 3・4 章で行う分析で必要となる理論的な背景についてもこの章で説明を行う。さらに動詞由来複合語の分類について先行研究を概観し、本研究でどのように分類を行うかについても述べる。

第 2 章では、『日本語発音アクセント辞典』(NHK 放送文化研究所・編, 1998)から収集した動詞由来複合語を分類し、アクセントを持つ割合と連濁が起きている割合について調査した。動詞由来複合語は、前部要素が後部要素の内項であるもの(Type I-III)と前部要素が後部要素の付加詞となっているもの(Type IV)に大別され、さらに前者は前部要素が文レベルで取る格助詞によって、「を」格の Type I、「が」格の Type II、「に」格の Type III に分類される。本研究ではこれら四つのタイプについて、それぞれ前部要素と後部要素の長さごとにアクセントと連濁の関係がわかるような形で、アクセントと連濁の割合を示す。

先行研究で比較されてきた二種類の動詞由来複合語は Type I と Type IV に該当するが、調査の結果、先行研究で指摘されてきた傾向が裏付けられ、さらに三つのことが明らかになる。一つ目は、Type I で後部要素が短い場合でも「アクセント無し(平板型)・連濁有り」となるパターンがある程度見られることである(例：「痛み止め」)。二つ目は、Type I で後部要素が長い場合でも、連濁しない場合が少なくないということである(例：「熱冷まし」)。最後に三つ目は、Type IV で後部要素が長い場合でも、アクセントを持たない場合がある程度観察されるということである(例：「半乾き」)。また、Type II と Type III のアクセントと連濁に関しては、従来の研究ではあまり扱われてこなかったが、調査の結果、これら二つのタイプは Type I とは異なった傾向を示し、同じ内項を前部要素として持つ複合語であっても、文レベルでの格助詞によって区別する必要があることが明らかになる。

第 3 章では、Type I と Type IV のアクセントパターンの違いについて、名詞複合語と比較しながら最適性理論の枠組みで分析を行う。まず、3.1 節では三種類の複合語(Type I, Type IV, 名詞複合語)のアクセントパターンをアクセントの位置とアクセントの有無という二つの観点で比較する。アクセントの位置に関しては、動詞由来複合語では後ろから三番目の位置しか許されないが、名詞複合語では、後部要素が後ろから二番目の位置にアクセントを持つ場合、それを保持して後ろから二番目にアクセントを置くことも許される。アクセントの有無に関しては、平板型の出現環境という観点で見ると、名詞複合語では平板化形態素を後部要素に持つ場合に限られる。これに対し動詞由来複合語では、Type I では前部要素が短い場合のみ平板型が出現可能で、Type IV では前部要素が短い場合も長い場合も平板型が出現する。

3.2 節では、このような異なるタイプの複合語の相違点を、先行研究における名詞複合語の最適性理論による分析を発展させる形で、制約のランキングの違いとして捉える。具体的には、アクセントの位置に関する違いは NON-FINALITY (Ft)と NO-FLOP-PROMINENCE との関係によって捉えられ、名詞複合語では忠実性制約である NO-FLOP-PROMINENCE が高い位置に置かれる。また、アクセントの有無に関する違いは、アクセントのある候補を好む制約・アクセントのない候補を好

む制約・ALIGN-L (σ', root)の三者の関係によって説明され、アクセントのある候補を好む制約が、名詞複合語では高い位置に、Type I では中間的な位置に、Type IV では低い位置にそれぞれ置かれる。

また、3.2 節の分析の過程では、これまでのアクセント研究ではあまり取り上げられてこなかったいくつかの問題についても提案を行う。例えば、名詞複合語の研究で従来例外とされてきた平板化形態素に関して、特殊なランキングの指定という形で文法による説明を可能にする。また、単純語と複合語のアクセントのシステムの違いや動詞由来複合語の後部要素である動詞連用形のアクセントについても考察を行う。

3.3 節では、三種類の複合語のランキングの違いが複合語の「語彙カテゴリー」(形態ではなく、意味や機能によって決まる名詞性・形容詞性・動詞性)によって説明可能であると提案する。名詞複合語も動詞由来複合語も形態的には名詞であるが、Type IV の動詞由来複合語は「本を立ち読みする」のように直接「する」をつけて動詞として機能することができ、動詞的であると言える。また、Type I の動詞由来複合語は、「道具」「人」「行為」など様々な意味を持ちうるが、「行為」を表す場合があるという点において名詞複合語より動詞性が高いと言える。ただし、「する」をつけるには「草刈りをする」のように「を」が必要となるという点で名詞に近く、名詞らしさという観点で見ると Type I は名詞複合語と Type IV の中間に位置すると考えることができる。

そして、日本語の他の語形成におけるいくつかの現象から、名詞的な語はアクセントを持ちやすいことを示し、そのことが、アクセントのある候補を好む制約が名詞複合語で高い位置に置かれている背景にあるということを指摘する。また、Type I は名詞的な意味と動詞的な意味の両方を表し得るが、名詞的な意味のものはアクセントを持ちやすいということがデータによって示され、複合語の「語彙カテゴリー」とアクセントの間に関連があるというより強い証拠となる。さらに、名詞複合語において NO-FLOP-PROMINENCE が高い位置に置かれるということは、名詞的な語は入力形に対する忠実性が高くなるという考え方(Noun Faithfulness)によって説明できることも示される。

第 4 章では、連濁とアクセントの相補分布や三種類の複合語の連濁に関する違いを最適性理論の枠組みで分析する。4.1 節では Type I に見られる連濁とアクセントの相補分布について論じ、なぜ相補分布が生じるのか、また、なぜ相補分布は後部要素が短い場合にしか見られないのか、という問題について、従来指摘されてきた境界表示の機能という考え方に加えて、アクセントと連濁の位置を揃えるという働きを仮定することによって解決が可能であると提案する。4.2 節では、「アクセント有り・連濁無し」の Type I と「アクセント無し・連濁有り」の Type IV について、両者の違いは連濁とアクセントの相補分布によって生じるのではなく、連濁の違いとアクセントの違いはそれぞれ別々に複合語のタイプの違いから生じているということを示す。アクセントの違いについては第 3 章で複合語の「語彙カテゴリー」の違いから生じることを示したが、連濁の違いが生じる理由に関しては、複合語の内部構造の違いと語形成のレベルの違いという二つがあり得る。4.3 節では、基本的に連濁を起こす名詞複合語と Type IV の動詞由来複合語、そして連濁を起こす場合と起こさない場合がある Type I の動詞由来複合語について、最適性理論の

枠組みで制約のランキングの違いとして捉える。最後の第 5 章では、本研究の内容をまとめた上でその意義を述べ、今後の課題についても言及する。